

おあもと

ん！もどしりだい

××××★××× 25

これまで、開祖さま、聖師さまについて、たくさんのお話を聞いたモンちゃん。ワクワク・ドキドキ、時にはちょっぴり切ない気持ちも味わって、ますますおじいちゃんの話に引き込まれていくのでした。今回からはこの方のお話です。



モンちゃん



おじいちゃん



モン ね、次は誰のお話なの？

おじい 分かった分かった(笑)。次は、二代教主さまのお話じゃ。

モン 二代教主さま？

おじい すみ子さまじゃ。覚えていないかな？

モン あっ！ 開祖さまの一番下の…！

おじい そうじゃ、八人目のお子さまじゃ。

モン そういえば、後に二代教主さまになれるんだって、おじいちゃん言ってたね。

おじい 思い出してくれて何よりじゃ。

二代教主さまは、明治

十六年二月三日に綾部でお生まれになった。幼いころの生活の様子は、『おさながたり』という本の中に、詳しく書いておられるんじゃ。モンちゃんももう少し大きくなったら読んでみるつもり。



大変、読みやすい神書でございます。



ほっほ、



モン そうなんだ。もうちょっとたくさん字を習ったら読んでみるね。
おじい そうじゃな(笑)。さて、開祖さまのときも話したが、二代さまがお生まれになったころの出口家は、生活をするのにとても苦しい時期じゃった。
モン うんうん、そうだった、そうだった。たしか、開祖さまは、りょうさんをおんぶして、赤ちゃんの二代さまを抱っこしながら、おまんじゅうを作られていたんだよね。

おじい モンちゃんすごいっ！ちゃんと覚えておるんじやの〜。
モン もちろん！
おじい おまんじゅうの粉をひくために、石臼を回される開祖さまのお姿が、二代さまの心の中には、いつまでも残っておられたようじゃな。
モン 赤ちゃんのころから、ずっとそばで見えおられたんだもんね。
おじい また、生活が苦しく、休む間もないくらい働かれていても、決して髪も服装も乱されず、いつも清潔に、きちんとした身なりをされていた開祖さまが、ひそかな誇りであったとも書かれておる。お母さんを慕う二代さまのお気持ち、よく伝わってくるの〜。
モン ほんとだね。モン

も、お母さんのこと大好きだから、分かるなあ。
そして、二代さまは、お姉さんのりょうさんと、開祖さまがお仕事から帰るまで、お手伝いしながら、ちゃんとお留守番していたんだよね。
おじい そうじゃよ。夜の八時過ぎまで待つ間の、心細さ、寂しさは、大人になっても忘れられなかつたということじゃ。だからいつも、時間になると途中まで迎えにゆかれ、遠くの方からシトシトという足音が聞こえてくると、「お母さん、帰ってきたなはった」と、開祖さまのところに飛んで行かれたそうじゃ。
モン そうやって毎日、寂しいのをがまんして、いい子で待ってたんだ…。
おじい おじいちゃんも、

二代さまのこういったお話は、胸がしめつけられるほど、切なくなるんじゃない。しかし、二代さまのご苦労は、まだまだこれから始まるんじゃない。



何度、涙したのか…



教主さまたちについて分からないこと、
 疑問に思ったことは、どんどんお手紙で
 送ってね。待ってまーす！！
 〒621-8686 亀岡市天恩郷
 「みろくのよ」編集室
 「もつとしりたい おおもと」係

二代さまについて、おじいちゃんの分かりやすいお話が始まりました。仕事に出られた開祖さまを待つ間、しっかりと留守番をしておられた二代さまですが、なんともほほ笑ましいエピソードもあり、興味深いところです。



モンちゃん



おじいちゃん



おじい さて、二代さまのお父さんの政五郎さんが病気で寝込まれた話は、開祖さまのときにしたと思うが…。

モン うん！ ちゃんと覚えてるよ。

おじい そうかそうか。二代さまはお姉さんのひささん、お兄さんのひささんとともに、お父さんの看病や家のお手伝いをがんばっておられた。しかし、二代さまが六歳のころ、お父さんは亡くなってしまった。

モン それも覚えてる。『開祖さま、とても寂しいだろうなあって』、ちよっ

と悲しい気持ちになったから…。

おじい そうじゃったなあ。

お父さんが亡くなってからは、ひささんは八木というところに奉公に出られ、家にはお兄さん、お姉さんと二代さまの二人だけになり、開祖さまが仕事に出ておられる間、留守番をしておられた。

モン 寂しいのをがまんして、お利口に待っていたんだよね。

おじい 確かに、しっかりと留守番をされていたようじゃが、『おきながたり』には、二代さまの



子供らしさや、やんちゃぶりも記されておるんじゃない（笑）。
モン へえ、二代さまってやんちゃだったんだ。おじい そのころ、二代さまの家は屋根に大きな穴が開いていて、雨が降

るたびに、その真下の土間がくぼみ、小さな池ができたそうじゃ。雨の日には、家の中に池ができたと言っては喜び、裸足でビチャビチャと歩き回ったり、捕まえた魚やメダカを入れて泳がせたりして、おりようさんと楽しめたそうじゃよ。
モン すっごく楽しそう！ いいなあ。
おじい 魚がはねたり、ゆうゆうと泳ぐのをどんなに楽しんで見たことでしょう。と、懐かしんでおられる。
 やんちゃぶりはという
 と、毎朝、二代さまの家の前を、学校に行く子供たちが通っていたそうじゃが、それを見ているうちに、なんとなくならずらをしてみたくなり、両手を広げて通せんぼし



てみたり、年上の男の子とけんかして負かしてみたりと、その町内ではちょっとした有名な人だったそうじゃよ。
モン おてんばさんだったんだね。でも、周りの人に怒られたりしなかったのかなあ？
おじい いろいろないたずらをして、あの子の顔を見たら憎めんなと、

むしろ人気者だったそうじゃ（笑）。
モン へえ、そうなんだね。モンちゃんも、ちよっといたずらしてみちゃおっかなあ。
おじい それはやめといた方がいいかもよ。（小声）…お母さん、怖いから…。
モン だね…（汗）。



教主さまたちについて分からないこと、疑問に思ったことは、どんどんお手紙で送ってね。待つてまーす！！

〒621-8686 亀岡市天恩郷
 「みろくのよ」編集室
 「もつとしりたいおおもと」係

二代さまの意外なやんちゃぶりに、どこか親しみを覚えるモンちゃん。しかし、昔のご生活は、モンちゃんの想像をはるかに超えた大変なもの。幼い二代さまの奮闘する姿に、ただただ感心してしまうモンちゃんでした。



モンちゃん



おじいちゃん



照れまのあま...



ほめだのほうつか...

モン それにしても、二代さまがそんなにもやんちゃだったなんて、意外だなあ。
おじい ははは、そうじゃの。モンちゃんも負けではおらんぞ。
モン いやあ、それほどでも...

おじい さて、二代さまはその後、福知山に奉公に出られることになった。わずか七歳のときじゃ。
モン え？ 七歳で？
おじい そうじゃ。しかも、福知山に行かれる際は、開祖さまは仕事を休まれるわけにもいかないので、二代さまお一人でお出されたんじゃ。
モン 綾部と福知山って近くなの？
おじい およそ十三キロくらいじゃろう。小さな子供の足だと、四時間近くはかかるじゃろつなあ。
モン そんな長い道のりを、二代さまは一人で歩

かれたんだ。

おじい 出発のとき、開祖さまは二代さまの手首に手紙をくくりつけ、人に会うたびに見せるように言われたんじや。言われた通りに、途中で出会った女性にその手紙を見せ、その人が福知山の入り口まで連れて行ってくれたそうじや。

モン 私だったら、そんなに素直には行けないなあ。お母さんからなかなか離れられないかも…。

おじい そうじやなあ。でも、この時代では、十歳前後には、親元を離れ、奉公に出るのはよくあることだったんじや。それにしても、二代さまはまだ七歳ということじゃから、やはり、なかなかできないことじやな。

さて、その後、福知山



の奉公先にたどり着かれた二代さまは、子守奉公として働かれたんじや。
モン 子守奉公って、子守りをするってこと？
おじい そうじやよ。
モン 子供が子供の世話をするって、変な感じだね。
おじい これも、奉公ではよくあったことじや。小さな子供が、赤ちゃんをおんぶしてずっと面倒を見るんじやから、大変な仕事だったじやろうなあ。しかし、二代さまは、このときはまだ小さすぎて、十分な奉公ができず、すぐに開祖さまの元に戻られたそうじや。

モン そっか、よかったね！

おじい じゃが、またすぐ福知山に行かれたんじや…。

モン あらま…。

おじい 次はお米屋さんで子守奉公されることになったんじや。そしてあるとき、二代さまを心配して開祖さまが奉公先まで会いにこられたそうじや。

モン 二代さま、すぐーくうれしかったらうね。

おじい もちろんじや。とにかくお母さんを離すまいと、赤ちゃんを背負ったまま、ずっと開祖さまの着物の端をつかみ、そばにおられたそうじや。トイレに行くのもがまんして…。

モン 私も、しがみついで離れないだろうな。

おじい じゃが、別れるときが来てしまい、二代さまは開祖さまに優しく諭され、寂しいのをがまんして、なんとか福知山に残られたとのことじや。
モン はあ、本当に切ないなあ…。
おじい そしてこれからが、いよいよ苦勞の始まりだ、と書かれておる。



教主さまたちについて分からないこと、疑問に思ったことは、どんどんお手紙で送ってね。待つてまーす！！

〒621-8686 亀岡市天恩郷
「みろくのよ」編集室
「もつとしりたい おおもと」係

おおもと

ん！もどしりたい

××××★××× (28)

『いよいよ苦勞の始まり、というおじいちゃん言葉に、モンちゃんは少しびっくり。『これまでも大変だったのに…？』。そう思いながら話を聞きますが、おじいちゃんの言う通り、二代さまのさらなる試練は、もはや想像できない世界でした。



モンちゃん



おじいちゃん



モン これからが苦勞の始まり…って、どういこと？ もう十分苦勞されてるなあって思うんだけど。
おじい 福知山に二度目の奉公に行かれた後、しばらくして、二代さまは再び綾部に帰ってこられた。それからしばらくは、家で姉のおりょうさんと共に、芝刈りや水くみなど家の仕事をし、もちろんしっかりと遊びつつ、留守番をしておられたんじゃ。
モン さすが、やんちゃん二代さま！
おじい そうじゃな(笑)。

その後、八木にお嫁に行かれた姉のおひささんのところではばらく過ぎた後、二番目のお姉さん、おことさんが暮らす王子というところへ行かれることになったんじゃ。
モン そっかあ。お姉さんがたくさんいるから、二代さまも寂しくなくて良かったね！



おじい 普通ならそう思うところじゃが、この王子での生活は、二代さまにとつて忘れることのできない、つらい毎日だったんじゃない。

モン え？ なんで？

おじい これも、神さまからの修行なんじゃろう。おことさんは、二代さまのお姉さんではあったが、二代さまに對してとてもきつい態度で接したんじゃない。

モン いつも怒られるとか？

おじい そうじゃなあ。お姉さん夫婦が仕事の間、二代さまはお姉さんの子守りをしたり、家事をしたり、よく働かれた。しかし、ほんのささいなことでもひどく叱られ、ご飯も満足には食べさせてもらえなかったと記さ

れておる。

モン え、そんなのひどい、かわいそすぎるよ。姉妹なのに…。

おじい そんなとき、二代さまはいつも、開祖さまが別れ際にささやかれた「おすみや、お前に行をしてもらわんならんな。つらいやろうが辛抱してきておくれよ」というお言葉を思い出し、心の中からそのお声が聞こえるたびに、「はい」と答えて、耐え忍ばれたんじゃない。

モン いくら修行っていつても、私には絶対に耐えられない。想像もできないことだよ。

おじい まったくそうじゃ。

そんな生活で、二代さまは、すっかりやせ細ってしまわれたじゃが、



たまたま八木のひさこ姉さんの旦那さんが、仕事で通りかかった際、そんな二代さまの姿を見てびっくりされ、すぐに迎えに来てくれたということじゃ。

モン 本当につ？ 良かった。おじい そして、しばらく

く八木で過ごされた後、綾部に帰られたそうじゃ。
モン はあ、安心したよ…。

おじいちゃん、神さまの修行って、とても大変なんだね。

おじい モンちゃんの言う通り、とつてい想像できなほど、厳しいものなんじゃな。



教主さまたちについて分からないこと、疑問に思ったことは、どんどんお手紙で送ってね。待つてまーす！！

〒621-8686 亀岡市天恩郷
「みろくのよ」編集室
「もつとしりたい おおもと」係

大変なご生活をけなげに乗り越えられる二代さま。そんな中、いよいよ時節が到来し、開祖さまのご帰神を、若い二代さまは目の当たりにされます。そして神さまの言われるまま、素直にご用にお仕えされるお姿に、モンちゃんは感心しきりなのでした。



モンちゃん



おじいちゃん



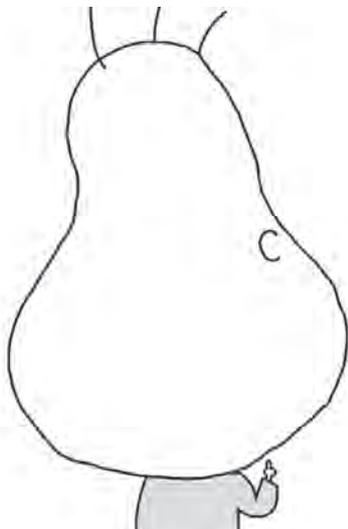
おじい さて、二代さまは神さまの修行のため、幼いながらに、いろいろな苦勞をされてきたことは、よく分かったじゃろっ？

モン うん。切なくなっちゃうほど、よく分かったよ…。

おじい その後、綾部に帰られた二代さまじゃが、九歳になられたころ、これまた一大事が起こったんじゃ。

モン え、今度は何なの？

おじい 明治二十五年のことじゃ。前に話したことがあがるが、覚えておら



本当は、まだまだたくさん苦勞されておるんじや…



本当に、切なくなさるるの、おじいちゃん…

んかのお。

モン 明治二十五年…？
うくん、めいじ…にじゅうご…。あっ！ 分かった！ 開祖さまの中に、神さまが入られた時だね！

おじい そうじゃやそうじゃ。よく思い出せました。

モン そっか、二代さまが九歳のときだったんだね。

おじい 前にも話した通り、明治二十五年旧正月元旦の夜、開祖さまの帰りを待つ間に寝てしまわれた二代さまは、「すみや、起きてくだされ」と、とても威厳のある声で、開祖さまに起こされたそうじゃ。

モン いつもの声とは感じが違っていったの？
おじい そのようじゃ。

いつもは帰りが遅くても「まんじゅうを買ってきたぞや」と言っつて、二代さまたちが寝ているそばまで来てくれたのじゃが、その時は、突然大きな声で、「ここを開けい」とおっしやつたそうじゃ。

モン それはかなりびっくりだね。

おじい さらに、西町にいるお姉さんのところに行つてくるように言われ、二代さまは飛び起きて、夜の真つ暗な道を、お姉さんの家まで泣く泣く走つて行かれたということじゃ。

モン お母さんの様子も違うし、夜の道を一人行かなきゃいけないし、そりゃ、泣いちゃうよ。

おじい しかし、その後家に帰ると、またいつもの優しい開祖さまのお声で、「寒いから風邪をひかぬよ

うにして、早くこたつに入つておやすみ」と言われたそうじゃよ。

モン あゝ良かった。でもそれからは、神さまのご用で忙しい開祖さまの姿を、ずっとそばで見えていたんだよね。

おじい そうじゃ。神懸りになられてからのご生活は一変し、二代さまも夜中に起こされては、神さまからのお使いを頼まれ、それを素直に聞いておられたんじゃ。

モン そんなに小さい時から、神さまのお仕事をされていたんだね。



教主さまたちについて分からないこと、疑問に思ったことは、どんどんお手紙で送つてね。待つてまーす！！

〒621-8686 亀岡市天恩郷
「みろくのよ」編集室
「もつとしりたい おおもと」係



おおもと

ん！もどしりたい

××××★××× ③⑩

新たな奉公先である農家で、さまざまな仕事をこなされる二代さま。中でも機織りは、生涯、そのご用に励まれるきっかけとなった貴重な体験だったとのこと。そうして日々を過ごされていた二代さまはいよいよ、あるお方と出われるのです。



モンちゃん



おじいちゃん



モン すごいなあ。農家っていうから、野菜とかお米とかを作るんだと思っただけど、いろんなお仕事

れたんじや。一日中、休む暇なく働か

話、機織り、糸つむぎなど、を、家の掃除、牛の世話をし、起きて食事などの準備

おじい 今度は主に、農家の仕事を経験されたよ

うじや。朝は誰よりも早く起きて食事などの準備を、家の掃除、牛の世話をし、糸つむぎなど、一日中、休む暇なく働か

二代教主さまつて
どんなん方？

おじい 機織りのご用は、今の五代教主さまの時代

たんだ。おじい 機織りのご用は、今の五代教主さまの時代

機織りのご用をされたんじやよ。おじい へえ、そういうことも神さまのご用だったんだ。

おじい そうか、それは良かった。まあ、いずれ詳しく話そうと思うが、二代さまは神さまの大事な

なご仕事として、生涯、機織りのご用をされたんじやよ。おじい へえ、そういうことも神さまのご用だったんだ。

があるんだね。おじい そうじゃなあ。さまざまなお仕事をされておるが、中でも、この時に覚えられた機織りは、私の一生を、染め織の楽しみに打ち込ませる発端になった”と記しておられる。

モン 機織り、知ってる！前に家族でお出掛けしたとき、体験したんだー。楽しかったよー！



まで、ずっと受け継がれておる。

さて話を戻すが、私市で数年奉公された後、十七歳ごろに綾部に帰ってこられた二代さまは、それからも近所のいろいろな家に奉公に出ながら過ごされておった。そのころには、開祖さまがお祭りされた神さまをお参りにくる人も、徐々に増え始めたんじや。

モン そっか。すごい神さまだっことが、だんだんみんなにも分かってきたんだね。

おじい そうじやの。そして、二代さまはこのころ、ある方と出会われるんじや。

モン ある方？

おじい 亀岡の方から来られる方じやよ。

モン あ、もしかして聖師さま？

おじい ピンポーン！

モン よしっ！ じゃあ、

聖師さまが大本に入られたころなんだね。

おじい そうじやな。前に話した通り、聖師さまはちよつと変わった格好をしておられ、二代さまも、初めて会われた時、不思議な人〴〵と思われたようじや（笑）。

モン そうだよな。私も

変なの〴〵って思ったもん（笑）。

おじい しかしいつも、穏やかで、温かみのある、何だかぬくい感じのする人〴〵と思っておられたようじやな。

そして聖師さまが大本入りされた翌年の明治三十三年、二代さまと聖師さまは、めでたくご結婚されたんじや。

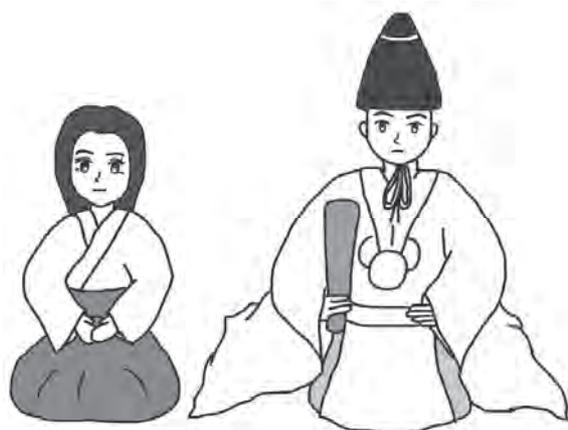
モン わぁ、そうなんだ。おめでとうございま

す！

おじい 聖師さまと二代さまのご結婚は、神さまが決められた、とても重要なお仕組だったんじやよ。

モン おお。運命の人だったってことね。

おじい そ、そうじやな。モンちゃん、意外に大人ですなあ…。



教主さまたちについて分からないこと、疑問に思ったことは、どんどんお手紙で送ってね。待ってまーす！！

〒621-8686 亀岡市天恩郷
「みろくのよ」編集室
「もつとしりたい おおもと」係